新地町の漁師たち

監督：山田徹　音楽：3日満月　製作・撮影・編集：山田徹/2016年/93分/HD/16:9/Blu-ray Disc

■ ストーリー

福島県新地町の漁師たちを2011年から3年半の期間撮影した記録映画。東日本大震災による津波と原発事故によって福島県の漁師たちは生業としてきた漁業を自粛せざるをえなくなった。操業の目処がたたない中、海での漁業権を持つ漁師たちと東京電力との間で増え続ける汚染水対策の一つである「地下水バイパス計画」の説明会が始まった。計画を容認するか否かの意見が漁業者間でも分かれる中、いかに合意形成を図るかが問題となっていた。単純な復興とはいかない環境下で漁師たちは何に苦しみ、何を考え、どう活動していくのか。漁師という家業、浜の伝統行事など、土地の暮らしや歴史を見つめ直しつつ、災害が生んだ矛盾や困難を描くことで、被災者の主体を超えた「我々の復興」を私たちに問いかけていく。

■ ディレクターズノート

311直後に新地町を訪れた私は、津波の被災だけではなく原発事故による放射性物質の海洋汚染によって福島の漁業が絶望的状況下にあることを知りました。自分たちを育んできた海、生業としてきた漁業の歴史を一度に奪われた人々は、これからこの地でどう生きていくのか。海はもう再生不可能なのか。私は漁師たちの行く末を記録しようとカメラを回し始めました。2016年2月現在、福島の漁業は継続してきたモニタリング調査の結果、安全と判断された72種の魚介類を対象とした試験操業ができる状態まで回復しました。しかし、原発は収束しておらず風評被害の問題もあることから、福島の漁業は未だ復興できない状況にあります。原発収束や継続的なモニタリング調査は漁業の復興上大事なことです。しかし、復興を考える上で重要な問題は「フクシマ」という記号から抱く様々なイメージから私たち自身が現実の「福島」の漁業者の復興を妨げていることにあります。無意識の自虐行為による傷から私たちは「復興」しなければなりません。福島の漁業者が自立した人間として本格操業を行えること、そして、福島が抱える多くの問題を考える一つのきっかけとして、この映画を被災地内外の場を超える多くの方々に観ていただきたく思います。

プロフィール：山田徹 1983年、東京新宿生まれ。自由学園卒。映画美学校ドキュメンタリー科を経て、2009年からドキュメンタリー映画の製作会社である自由工房に勤務。記録映画作家である羽田澄子監督に師事する。演出助手の作品として『遥かなるふるさと 旅順・大連』『そしてAKIKOは…あるダンサーの肖像』。そのほか個人活動として国内アートプロジェクトの記録映像に関わりつつ、2011年3月11日の東日本大震災から4年半をかけて映画『新地町の漁師たち』(2016)を完成させる。本作が初監督作品となる。 お問合せ： info@yamadatoru.com